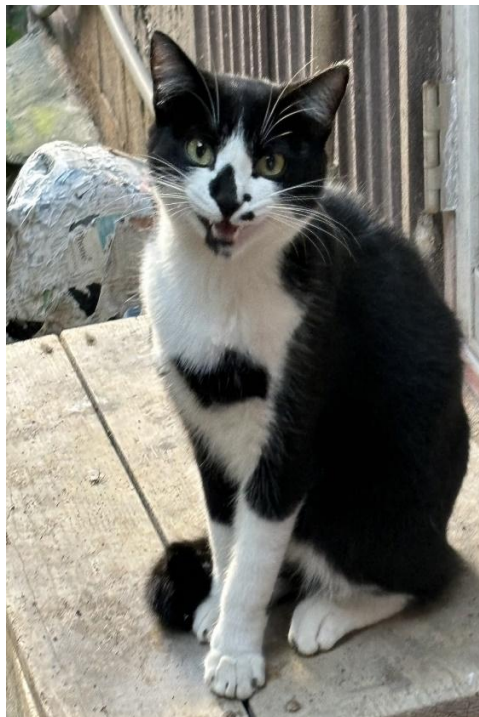


猫の TNR 活動について

～不幸な猫がいない社会を目指して。熱海市での活動報告～



TNR する前の飼い主のいない猫 TNR 後は
耳に V の字カットがなされる。捕獲前の写真

2025 年 3 月

光村 智恵

目次

1. はじめに
2. 野良猫（飼い主のいない猫）問題の背景と原因
3. TNR 活動の事例紹介
4. 事例から見えてくること
5. 個人で行う TNR 活動——自分の活動について
6. 活動の課題と要因
7. 多頭飼育崩壊と災害時対応
8. 人と猫の共存をめざして

1. はじめに

TNR 活動とはなにか

みなさんは、「TNR 活動」という言葉を聞いたことがありますか？

TNR とは、猫を一度捕獲し（Trap）、不妊・去勢手術を施し（Neuter）、元の場所に戻す（Return）活動のことをいいます。これは、地域に暮らす飼い主のいない猫たちと、人間との共生をめざすための取り組みです。

手術後には、手術を受けたことがひと目でわかるよう、耳先を V 字にカットします。その姿が桜の花びらに似ていることから、「さくら耳」と呼ばれ、「さくら猫」として地域で見守られていきます。こうすることで、同じ猫が何度も不妊・去勢手術のために捕まり、怖い思いや痛い思いをすることを防ぐことができます。

野良猫（飼い主のいない猫）という、「迷惑な存在」として見られることが多く、発情期の鳴き声や糞尿の問題、餌やりのマナーなどがトラブルになりがちです。かつてはこうした問題への「解決策」として、殺処分が選ばれてきました。けれども最近では、動物愛護意識の高まりを受け、「殺す」ことではなく、TNR によって「増やさない」ことで共に暮らしていこう、という考え方が少しずつ広がってきています。

TNR 活動の歴史

野良猫への不妊去勢手術が増えたのは 1990 年代頃からです。この背景には、不妊去勢手術の技術が向上があります。小さな切開部で不妊去勢手術手術が行えるようになったことで、野良猫の不妊去勢手術を行う病院も増えました。

猫は 1 年に 3 回も出産し、1 回に 5 匹前後の子猫を産みます。1 頭の母猫から生まれる子猫、孫の代の猫の数は条件次第では 50～60 匹ともいわれています。放っておけば、あっという間に「地域の困りごと」になってしまうのです。だからこそ TNR 活動は重要です。

米国では Alley Cat Allies が、1990 年代初頭に TNR を先駆けてを実施・推進しはじめました。さらに TNR を支援する条例を定める自治体もあります。ニュージャージー州のストーンハーバーでは、2005 年に「指定された地域で保護された野良猫には TNR プログラムに基づいて適切に処理すること」を定めています。

動物保護団体の動きも活発です。例えば、英国では RSPCA(王立動物虐待防止協会)と保護

団体キャッツ・プロテクションが連携して、TNR プロジェクトに取り組んでいます。またドイツ動物保護連盟は野良猫の不妊去勢手術を義務付けるよう国に求めているそうです！

日本はどうでしょうか？ 『のらねこ白書』によると、野良猫に不妊手術を行い、適切に世話をしながら地域で共に暮らしていこうという取り組みが、1990 年代に一部の地域で始まりました。1999 年には横浜市磯子区で「磯子区猫の飼育ガイドライン」が制定されるといった動きもありました。現在では、野良猫の不妊去勢手術にたいして助成金を出している自治体も多数あります。

さらに 2005 年には犬や猫の殺処分ゼロの実現に向けた活動をしている公益財団法人「どうぶつ基金」が、無料不妊手術事業を始めました。近年では同基金が「TNR 地域集中プロジェクト」として、直営病院を開設して、特定地域の TNR 活動を集中的に行うプロジェクトを実施しています。

TNR 活動を行っているボランティア団体も多数あります。こうした中、私自身も「少しでも不幸な命を減らしたい」という思いから、2015 年頃から個人として TNR 活動に取り組むようになりました。



2. 野良猫（飼い主のいない猫）問題の背景と原因

そもそも、なぜ「飼い主のいない猫たち」がいるのでしょうか。

元は飼い猫だったのに、何らかの理由で外に出されてしまった——。あるいは、「かわいそうだから」と無責任に餌だけを与え、避妊や去勢手術をしないまま放置してしまった

――。理由はさまざまですが、野良猫のほとんどが人間の行動に起因していることは間違いありません。

環境省が発表した「犬・猫の引き取り及び処分の状況（2023 年度）」によると、保健所に引き取られた飼い主不明の猫のうち、およそ 85%がまだ乳離れもしていない幼齢の子猫でした。さらに、殺処分された約 9,400 頭の猫のうち、約 6 割以上（約 4,000 頭）がそうした生まれてまもない子猫だったのです。

こうした数字を目の当たりにすると、胸が詰まる思いがします。

「何のために生まれてきたのだろうか？」 「この子たちは、生きる間もなく、命を終えなければならなかったのだろうか？」 そんな理不尽な問いが、心の中に浮かんできます。しかも、こうした殺処分のためにかかる費用は、私たちの税金でまかなわれています。

さらに見過ごせないのは、飼い主のいない猫が虐待の対象となりやすいという現実です。耳をふさぎたくなるような事件が、あとを絶ちません。命をもてあそぶような行為が、人間の欲望のはけ口になってしまう――そんな悲しい出来事を、なんとか食い止めたい。そのためには TNR はとても重要です。こうした思いが、私がボランティアとして猫の TNR 活動を始めるときかけとなりました。

「すぐにやる。全部やる。続ける。」――これは TNR の 3 原則として知られています。猫はあっという間に増えてしまうため、この 3 つのうち、どれか一つでも欠けるとうまくいきません。長い時間と地道な努力、そして何より覚悟が必要な活動です。

私自身は、不幸な猫を一頭でも減らしたいという思いを原動力に活動を続けています。かといって、何か大げさな使命感に駆られているわけではありません。ただ、猫が好きだという素直な気持ちから、できることを続けています。



3. TNR 活動の事例紹介

私が TNR 活動を始めたのは、今から 10 年ほど前のことでした。ある日、自宅の庭に 1 匹の猫が現れました。人に慣れておらず、明らかに飼い主のいない猫でした。私にできることは何かと考え、手術をして、元いた場所にそっと戻しました。それが、私の TNR 活動の原点です。

当初は年間に 2～3 匹ほど、すべて自分で費用を工面しながら、できる範囲で行っていました。やがて、私の活動に共感し、支援してくださる方々が現れ、寄付などを通して応援してくれるようになりました。そうして少しずつ活動の幅も広がり、2024 年は約 30 匹の猫たちに TNR を行うことができました。

ここでは、いくつかの事例をご紹介します。

事例 1

熱海市某所 住宅地 事業所 2021～2024 実施

「ある事業所の敷地内に、たくさんの子猫がいるよ！」 そんな情報を近隣の方からいただき、現地へ足を運びました。そこには、手術を受けずに、餌だけをもらって暮らしている猫たちが数多く生息していました。その数、成猫と子猫を合わせて、およそ 20 匹。1 回の TNR ではとても追いつかず、5～6 回にわけて対応しましたが、その間にも妊娠・出産が続き、なかなか数が減りませんでした。結果的に、この場所での TNR が完了するまでに、約 3 年もの時間がかかりました。

この事例では、「猫はすぐにいなくなるから、TNR は必要ない」という思い込みが、問題を長期化させました。何度か話し合いの機会を持ちましたが、TNR の意義を理解してもらうことはできませんでした。命と向き合ううえで、私たち一人ひとりが果たすべき責任について、改めて深く考えさせられた現場でした。



捕獲は捕獲器を使う。猫のいる場所に仕掛け

事例 2

熱海市某所 住宅地 2022 実施

この事例も、地域の方からのご相談がきっかけでした。現場に行くと、空き家や物置をすみかにしていた猫たちは、成猫と子猫あわせて 15 匹ほど。餌やりさんがいて、お世話はしていたのですが、不妊去勢手術はしていなかったため、繁殖が止まらなかったのです。

この場所では、5 ヶ月かけて 3 回に分けて TNR を行いました。子猫たちは譲渡先を探し、成猫は手術をして元の場所へ。餌やりさんや周辺の住民の方が快く協力してくださったことで、全頭の TNR を比較的短期間に終えることができました。

理解と協力があると、これほどスムーズに進むのだということを実感した、希望の持てる事例でした。

事例 3

熱海市某所 住宅地 2024 年実施

ここでも、約 15 匹の猫たちが暮らしていました。成猫、子猫、そして妊娠中の猫もいました。「最初は 1 匹だったんです。でも、餌をあげていたら、いつの間にか増えてしまって……」困惑した様子で、餌やりさんはそう話してくれました。

約 3 か月をかけて、成猫の TNR、子猫の譲渡、妊娠中の猫には必要な処置を施し、これ以上猫が増えることのないよう対応しました。「どうしていいかわからなくて、本当に困

っていました」 そんな言葉をいただいたとき、ほんと胸をなでおろしました。

この事例でも、最初に餌やりさんが協力してくださったことで、短期間で TNR を完了することができました。やはり、最初の対話がとても大切だと、あらためて感じました。



茂みの中でそっと暮らしている
過酷な外での暮らしは、想像以上
に厳しいものである。

4. 事例から見えてくること

これまでにご紹介した現場は、ほんの一部にすぎません。

そして、どの現場にもほぼ共通していることがあります。それは、「最初はたった1匹だった猫が、あっという間に増えてしまった」ということです。

TNR に反対する人たちには「猫って、生まれてもすぐいなくなるでしょ？」と言う方がいます。こういう発言を聞くと、「なんて身勝手な！」と腹立たしく、そして悲しく感じます。外で暮らす子猫たちは、生まれてすぐに過酷な現実と直面します。食べ物も、水も、十分には得られません。生まれたばかりの小さな命は、カラスに襲われたり、車にひかれたりして、ほんの数日で命を落とすことも少なくないのです。でも、それは「いなくなった」のではなく、「生き延びられなかった」のです。

餌やりをしている方々はどうでしょうか？ 餌やりさんは基本的には猫が好きで、優しい

気持ちを持った方です。餌を与えること自体は、決して悪いことではありません。むしろ、動物愛護の観点からも、生きるために必要な行動です。ただ、餌をあげることとあわせて、繁殖を防ぐ手術も動物愛護の点から必要です。

私が活動が続けてきて感じたのは、「どこに相談してよいかわからない」と悩んでいる方が、とても多いということです。熱海市には、現在のところ猫に関する専門的な相談窓口はありません。もちろん、保健所に相談することはできますが、昔のイメージから「相談するとすぐに殺処分されてしまうのではないか」と心配して、声を上げることができずにいる人が少なくありません。「怒られるんじゃないか」と思って、何も言えずにいる方もいます。その間に猫の数は増え続け、事態はますます深刻化してしまうのです。

5. 個人で行う TNR 活動——自分の活動について

私が行う TNR 活動は、頭数が多い場合はかなりの日数を要します。それは、私が団体に属さない個人ボランティアだからです。一人での活動は大変なこともあります、メリットも多くあります。何より、自分のペースで活動できること。何時から何時までといった時間の制約もなく、今日は捕まりそうにないと思ったら無理をせず、別の日に切り替えることができます。

長く続けるには、自分なりのスタンスを大切にすることが重要だと思っています。とはいえ、頭数がとても多い場合には、他の個人ボランティアさんや団体に協力をお願いすることもあります。TNR の 3 原則「すぐやる。全部やる。続ける。」を実現するために、どのような状況でも成功に近づけるにはどうしたらいいか、何が猫たちにとって最適なのかを、いつも考えています。

「猫がたくさんいる」といった情報が入ると、現地へ向かい、まずは餌をあげている方とお話しします。最初から協力的な方もいれば、突っぱねる方もいます。でも、それぞれの方に理由があるはずです。だからこそ、対話を重ね、TNR の意味や必要性を説明し、何が障害なのかを探っていきます。

一番よくあるのは、「手術したいけどお金がないんです」という声です。そんなときには、「費用のことはこちらでなんとかしますから」とお伝えします。すると、協力していただくことが多いのです。

また「猫が嫌い」という方が TNR の障害になることもあります。鳴き声や糞尿、マーキ

ングなどに悩まされ、「迷惑だから駆除してほしい」と強い不満を持っている場合もあります。そういう方に TNR に賛同してもらうことは大変です。こうした場合は、理解してもらい TNR を完了するまで、何倍も時間がかかります。

私は動物が大好きです。でも、動物が苦手な人には、苦手なりの理由があります。だから、「好き」と「苦手」は、お互いに歩み寄る努力が必要だと思っています。また、どの現場も、状況はそれぞれ違います。すぐに理解してもらえることもあれば、心が折れそうになることもあります。それでも、私の背中をそっと押してくれるのは、いつもこの言葉です。

「猫のために。不幸な猫を減らしたい。」

これは、私にとっての原動力であり、活動続けるための魔法の言葉です。

6. 活動の課題と要因

TNR 活動が続けていく中で、少しずつ見えてきた課題もあります。

まず感じているのは、ボランティアの担い手の偏りと高年齢化です。『のらねこ白書』によると、現場で活動している方の 8 割以上は女性で、年齢層も 40 代以上が 8 割を占めるなど高年齢化が進んでいます。

活動を行う上で、もうひとつ大きな壁として立ちはだかっているのが、資金の問題です。

不妊・去勢手術そのものには、行政からの助成金や「どうぶつ基金」などの支援が使えることもあります。ただし、それ以外の出費——たとえば動物病院までの交通費、ノミ・ダニの駆除薬、現場で使う捕獲器や消耗品など——は、自分のお金やいただいた寄付でまかっています。TNR を行う日は、仕事を休んで現場に出向くこともあります。

つまり、時間的にも経済的にも、「持ち出し」が多いのです。私自身、「この活動をいつまで続けられるのだろう」と不安になることもあります。

「すぐにやる・全部やる・続ける」——この TNR の原則を守りながら活動していくためには、資金的な心配をせずに取り組める環境がどうしても必要です。たとえ潤沢でなくても、費用の心配がなければ、かなり活動が進むのではないかと感じています。



猫捕獲時の様子。
左側にある捕獲器に入るのを遠くで待つ。

7. 多頭飼育崩壊と災害時対応

TNR とは少し異なる話になりますが、猫に関わる問題として見逃せないのが、「多頭飼育崩壊」と、「災害時の避難対応」です。

近年、「多頭飼育崩壊」という言葉を耳にする機会が増えてきました。これは、飼い主が過剰な数の動物を飼ってしまい、適切な管理や世話ができなくなる状態のことを指します。当事者の多くは、高齢の方や経済的に困難な状況にある方で、不妊・去勢手術が行われないうまま、猫たちが「気がついたら増えていた」ケースがよくあります。熱海のように高齢者の多い地域では、今後この問題が増えていく可能性が高いと感じています。

そのときに必要なのは、一時的、あるいは中長期的に猫たちを保護・ケアできる場所——つまり、シェルターの存在です。

市内にはすでにシェルターを持つ NPO 法人もありますが、今の体制ではとても足りているとは言えません。行政・ボランティア・地域住民——この 3 者が協力しながら、シェルターの整備を少しずつでも進めていくことができたらと願っています。

もうひとつ、大切なテーマがあります。それは災害時に、猫たちとどう避難するのかということです。

災害が起きたときには、「同行避難」や「同伴避難」という言葉が使われます。

- ・同行避難は、飼い主とペットと一緒に安全な場所まで避難すること
- ・同伴避難は、そのうえで避難所でもペットを飼育・管理することです

ただし、「同伴避難」といっても、必ずしもペットと同じ部屋で過ごせるわけではありません。ペットが過ごす環境は避難所ごとに異なり、現実にはペットの受け入れが難しいケースも少なくありません。

たとえば、能登半島地震では、「避難所にペットを連れていけず、自宅で寒さに耐えながら過ごした」という話を耳にしました。電気も水道も止まった中での避難生活。人にとっても、動物にとっても、過酷な状況だったに違いありません。

さらに、多頭飼育をしている場合には、なおさら避難が困難になります。

「5 日分の水や餌、トイレなどを備蓄しておきましょう」とは言われますが、もし家が火災や倒壊にあってしまったら……そのとき、猫たちを守る術があるでしょうか。

私が暮らす熱海市では「ペットとの同行避難を推奨する」としてはいますが、具体的な受け入れ体制や避難所での対応については、まだ十分に整備されていないのが現状です。

ペットでさえこのような状況なのですから、野良猫たちについては…。だからこそ、野良猫に目を向けた取り組みも、あわせて進めていくことが大切だと思っています。

8. 人と猫の共存をめざして

ここまでご紹介してきたように、TNR 活動は、飼い主のいない猫たちを増やさないことを目指す活動です。近年では、こうした TNR の考え方に加えて、「地域猫活動」という考え方も少しずつ広がりつつあります。

「地域猫」とは、飼い主のいない猫が地域に受け入れられ、ルールのもとに地域住民と共に見守られながら暮らしていく仕組みです。不妊去勢手術や餌やり、トイレや清掃などを、地域で話し合いながら決めていくことで、トラブルを減らし、猫も人も安心して暮らせる環境を目指します。

私が行っている TNR は、「手術をして元の場所に戻す」という短期的かつ初動的な対策です。それに対して地域猫活動は、地域の中での「長期的な共生のしくみ」です。この 2 つの活動は密接に関わっています。

地域猫活動の中で避妊・去勢手術ができれば理想です。ただし、地域猫活動を通して、地域のすべての人々の理解を得るには相当な時間を要するでしょう。「猫が嫌い」という人もいますし、簡単な道のりではありません。だからこそ、すぐに対応できる TNR 活動が必要なのです。

TNR が日本で始まってから、もう 30 年以上が経ちます。「地域猫」という言葉が生まれてからも、25 年以上が経ちました。ゆっくり、少しずつ、でも着実に前に進んでいます。

殺処分される猫の数も、大幅に減少しています。環境省のデータによると、2014 年度には約 80,000 匹だった猫の殺処分数は、2023 年度には約 7,000 匹にまで減少しました。この 10 年間で、殺処分数はおよそ 90% も減ったことになります。さらに前に進んでいくためには、猫好きな人も猫嫌いな人も一人ひとりが地域に暮らす猫についての意識を高めていくことが必要だと考えています。

不幸な猫がいなくなる社会、人と猫が幸せに暮らせる社会は、私たち一人ひとりの行動の積み重ねで実現できる未来だと思っています。排除ではなく、共存へ——。そんな社会を目指して、これからも歩んでいきたいと思っています。

以上



TNR のために捕獲された猫
手術後、元のいた場所に戻される

参考資料

Alley Cat Allies ウェブサイト (<https://www.alleycat.org/about/history/>)

どうぶつ基金ウェブサイト (<https://www.doubutukikin.or.jp/>)

どうぶつ基金『ノラネコ白書 2023』

(<https://www.doubutukikin.or.jp/activitynews/20241101/48250/>)

環境省「動物愛護法」(<https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/>)

日本動物保護センター「自治体の助成制度」(<https://www.j-animal.com/local/>)

環境省「犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容並びに処分の状況」

(https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html)

環境省「ねこと共生するための地域的取組みの事例」

(https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/cat/04.pdf)